平安・鎌倉時代における「ゆする」「どよむ」の意味用法について

土居裕美子

目次

一　はじめに
二　平安時代和文における「ゆする」「どよむ」
三　院政鎌倉時代における「ゆする」「どよむ」
四　中世以降における「ゆする」「どよむ」
五　むすび

一　はじめに

本稿で取り上げる「ゆする」「どよむ」[1]は、平安時代和文において、ともに大勢が騒いでいる場面に用いられている。例えば、次の①は『源氏物語』朱雀院五十賀の試楽の場面、②は『栄花物語』冷泉院女御の逝去の場面であるが、

①十二月になりにけり。十よ日とさだめて、まひどもならし、とのゝうちゆすりてのゝしる。二条の院のうへは、まだわたりたまはざりけるを、このしがくによりぞ、えしづめはてゞわたりたまへる。（源氏物語　若菜下）

②とのにまづ「かう〳〵の事候」と申させ給に、すべてものもおぼえさせ給はで、まどひおはしましてみたてまつ〳〵り〳〵

（らせ）給に、あさましくいみじければ、かゝへてたゞふしまろびまどはせたまふ。とのゝうちどよみてのゝしりたり。さべき僧どもめしのゝしり、よろづの御誦経ところ〳〵にはしらせたまへど、つゆかいなくてかきふせたてまつらせたまひつ。（栄花物語　巻第二）

①は「まひ（舞）どもなら」すことによって、②は「さべき僧どもめしのゝしり」「よろづの御誦経ところ〳〵にはしらせ」などする状況によって、人々が多く集まった殿の内全体が騒動している様子を、①「とのゝうちゆすりてのゝしる」、②「とのゝうちどよみてのゝしりたり」と表現したものである。

このように、喧騒を表す語彙として、緊密といえないまでも緩やかな類義関係にある[2]二語が、平安時代和文ではどのように使い分けられているのか。また、他の時代や他のジャンルにおいて、両者の関係はどのようになっているのか。本稿は、平安・鎌倉時代を中心に、喧騒を表す語彙「ゆする」「どよむ」の意味用法を考察し、時代やジャンルを異にする文献における両語の関係の様相を明らかにすることを目的とする。

二　平安時代和文における「ゆする」「どよむ」

平安時代和文において得られた用例を単独動詞、複合動詞、転成名詞に分類して示すと［表Ⅰ］のようになる。[3]全体では「ゆする」の方が多く認められる。また、両者とも複合動詞としての用法が単独動詞とほぼ同じ程度見られ、特に「ゆする」は複合動詞二十六例／単独動詞二十三例と、僅差ではあるが複合動詞の方が多くなっている。

両者の意味用法について、まず「ゆする」を検討する。先に挙げた例のように、「ゆする」「どよむ」共に、喧騒の起こっている場や範囲を表す語句と共に用いられ、それらが主体となる場合も多い。そこで、まずそのような語句に注目し、単独動詞として用いられる二十三例を対象に検討する。

③やむごとなきかむだちめ弁官などの中にもおほかり。それよりしもはかずしらぬを、思ひしらぬにはあらねど、さ

［表Ⅰ］

		蜻蛉日記	宇津保物語	落窪物語	枕草子	源氏物語	紫式部日記	夜の寝覚	狭衣物語	讃岐典侍日記	栄花物語	大鏡	堤中納言物語	計
ゆする	単独	2	4	1	1	6			2		7			23
	複合動詞		4		1	5			2		13		1	26
	名詞		1						1					2
どよむ	単独		1		1	1	1	1			7			12
	複合動詞					2				1	8			11
	名詞										2		1	3
計														51
														26

しあたりて、いちはやきよを思はゞかりて、まいりよるもなし。よゆすりておしみきこえ、したにおほやけをそしりうらみたてまつれど、身をすてゝとぶらひまいらむにも、なにのかひかはとおもふにや。（源氏物語　須磨）

④冬になりゆくまゝに、いとゞかきつかむかたなく、かなしげにながめすごし給ふ。かの殿には、こ院の御れうの御八講、世中ゆすりてしたまふ。ことにそうなどは、なべてのはめさず、ざえすぐれをこなひにしみ、たうときかぎ

りをえらせたまひければ、このぜむじの君まいりたまへりけり。（源氏物語　蓬生）

⑤右大將をはじめきこえて、御をぢの殿ばら、みなかむだちめのやむごとなき御おぼえことにてのみものし給へば、あるじかたにも、我も〳〵と、さるべきことゞもはとり〴〵につかうまつり給。おほかた世ゆすりて、所せき御いそぎのいきおひなり。（源氏物語　少女）

③④⑤は「世・世中」という語句を伴い、喧騒の範囲が広いことが示される。例えば③は須磨に流された源氏について、世間の人々が惜しみ嘆いていることを説明する場面である。この部分について『花鳥余情』[4]には、

・世ゆすりかなしひ　かけろふの日記云　西宮の左のおとゝなかされ給を見たてまつらんとて天のしたゆすりてにしの宮へはしりまとふゆするは動と云心なり（巻第八）

と、『蜻蛉日記』の例が引かれ、「動といふ心」と注されている。源氏の悲運を嘆く世の中の騒ぎが、まるで揺れ動くようである、と比喩的に表現したものと考えられる。④は神無月八講、⑤は夕霧元服の準備の慌ただしさを描く場面で、喧騒の主体は不特定多数の人々であり、その喧騒の場、すなわち喧騒の及ぶ範囲は「世・世中」である。このように社会的に喧騒が広がっていることを表すものとして、『栄花物語』にも次のような例が見える。

⑥たちぬる月には、院の女御うせさせ給。又かくおはしまして、かく一天下のゆすりたる、これこそは天変なりけれ。いまはなに事のあるべきぞとみえたり。（栄花物語　巻第二十六）

以上のように「世中」や「天下」を伴う例は、単独動詞二十三例のうち十四例あり、その半分以上を占める。次に、やや範囲が狭まり、喧騒の場が建物の中であることを示す次のような例がある。

⑦御をぢのよかわのそうづちかうまいり給て、御ぐしおろし給程に、宮のうちゆすりて、ゆゝしうなきみちたり。（源氏物語　賢木）

⑧御とし十九年壬申とし、二月八日夜中にいでたまひて、出家せさせ給て、御まやのむまをいたつらに車匿（シャノク）がゐてか

へりまいりたれば、王、夫人、そこらの采女、宮の内ゆすりて泣き、又降魔成道転法輪忉利天にのぼり給て摩耶を孝したてまつりたまふ。（栄花物語　巻第十七）

⑨十二月になりにけり。十よ日とさだめて、まひどもならし、とのゝうちゆすりてのゝしる。二条の院のうへは、まだわたりたまはざりけるを、このしがくによりぞ、えしづめはてゞわたりたまへる。（源氏物語　若菜下）

⑩たゞこそ、おきはしりいでゝみるも、いとになきおこなひ人なりとみて、たゞぎみ、ふしおがみ給。さぶらひのぬしたち、「なでうおこなひ人を、かうふしおがみたまふ」こそ殿のうちゆすりて、たゞ君のおり給所に、五ゐ六ゐひざまづきかしこまる。（宇津保物語　忠こそ）

⑦⑧は「宮の内」、⑨⑩は「殿の内」という語句で、その喧騒の及ぶ場・範囲を示したものである。『源氏物語』の⑦は病に倒れた紫上が髪をおろす場面、『栄花物語』の⑧は、御堂の扉の絵に描かれた、太子出家の場面の描写である。また⑨は冒頭にも挙げた朱雀院五十賀の試楽、『宇津保物語』の⑩は、忠こそが訪れた行者を拝む場面である。いずれも、ある出来事が起こり人々が騒ぐという点で共通している。喧騒を生じるのはその場にいる人々であるが、その騒ぎを建物の中の状態として表している。これらの例は、単独動詞二十三例中、五例認められる。

次に、「天地」という語句によって、音が大きく響いていることを表すものがある。次の⑪は、「なん風」という琴の奇瑞として、その音色が、天地を揺るがすように響くことを表す場面である。(5)

⑪かゝる程に、すゞし・なかたゞ御こととのねひとし。右大将のぬし、もたせ給へるなん風をみかどに、「これなん、なかたゞがみたまへぬことに侍なり。つかうまつらせん」とそうし給。たまはりてなに心なくかきならすに、天地ゆすりてひゞく。みかどよりはじめたてまつりて、大におどろき給。（宇津保物語　吹上　上）

これらの他には、次のような例がある。

⑫いといみじきことかなと聞くほどに、人にも見え給はで、にげいで給ひにけり。「愛宕になん、清水に」など、ゆす

りて、つひに尋ねいでゝ、流したてまつると聞くに、あいなしと思ふまでいみじう悲しく（蜻蛉日記　安和二年三月）

⑬ながあふぎをさしやりて、かうぶりをはくとうちおとしつ。もとゞりはちりばかりにて、ひたひははげいりて、つや〳〵とみゆれば、物見る人にゆすりてわらはる。おきな袖をかづきてまどひ入（る）に、さと寄（り）て、一足づゝける。（落窪物語　巻之二）

『蜻蛉日記』の⑫は安和の変の際の騒動、『落窪物語』の⑬は、典薬助が大勢の見物人に笑われる場面である。このように、場や範囲は特に示されないが、多数の人々が語の主体となる例は複合動詞にも見え、

⑭この世をわかれ給御さほう、いみじくかなし。けふは、世を思すましたる僧たちなどだに涙もえとゞめねば、まして女官たち、女御、更衣、こゝらの男女、かみしもゆすりみちてなきとよむに、いと心あはたゝしう、かゝらでしづやかなる所にやがてこもるべくおぼしまうけゝるほいたがひておぼしめさるゝも（源氏物語　若菜上）

⑮「阿弥陀仏と申させ給へ」と申させ給に、いとよく申させ給へば、この僧達、心あはたゝしうかちまいりて、うけ給もいみじうかなし。うちにもとにもゆすりあひたるほどに、殿ばらをはじめ世の人〳〵まいりこみゆすりみちたり。（栄花物語　巻第二十九）

⑭「かみしも（上下）」、⑮「うち（内）にもと（外）にも」「（世の）人〳〵」のように、喧騒を生じている人間が多数存在していることを総称的に示している。

以上のように、喧騒の及ぶ範囲や場所、喧騒を起こしている主体を表す語句に注目し、複合動詞や名詞的用法も含めて分類すると［表Ⅱ］のようになる。合計の（　）内の数字は、単独動詞の用例数である。まず「世中」や「天下」のように、その喧騒が社会全体に及んでいることを表すものが多く見られる。次いで「殿の内」「宮の内」など、建物の内に喧騒が満ちている様子を表すものが多い。また、喧騒の主体として複数の人間が示されるものには、「上下」「内外」「人々」など、不特定多数を総称的に示す語句が見られた。これらのことから、「ゆする」は、喧騒を場や範囲全体のも

［表Ⅱ］平安時代和文の「ゆする」分類

		語句例	世中	天下	殿	宮	院	家	天地	山	路	上下	内外	人々	他	計
喧騒の〈場・範囲〉	〈社会〉	文献														
		蜻蛉日記														
		宇津保物語		1												1
		落窪物語	1		3				1	2						7
		枕草子						1								1
		源氏物語	6		1	1	1					1			1	11
		狭衣物語	2				1			1	1				5	2
		栄花物語			3	1							1	2		7
		堤中納言物語													1	1
		計	18(14)		13(5)				5(1)			15(3)				51(23)
喧騒の〈主体〉	〈人間の集団〉	計	1(0)	20(7)	5(2)	11(6)	2(1)	1(1)	9(4)	2(2)						

のとしてとらえて表す点に特徴があるといえよう。

次に、同様の観点で「どよむ」を検討すると次のようになる。

⑯殿なく〳〵、「かくは思たてまつり見けんや。かぶろにおはしましゝおりは、あまそりゐたけにこそみたてまつりしか。あはれにかなしきこと」といひつゞけなかせ給へば、院のうちもどよみなきたり。御くしそがせ給へる、うるはしきかづらの様にて、六尺ばかり。（栄花物語　巻第二十五）

⑰ひのくるゝまゝに、ほこ院のうちどよみのゝしりさはぎたるありさま、あはれにかなし。御まいりや御産やなどたび〳〵のゝしりし御いそぎのさまにひきたがえ、かなしき事かぎりなし。（栄花物語　巻第二十六）

⑯は院の女御が危篤となり髪をおろす場面、⑰は逝去した嬉子の葬送の場面である。どちらも複合動詞の例であるが、先に述べた「ゆする」と同じく、⑯「院のうち」⑰「ほこ（法興）院のうち」と、喧騒の場を示す語句を伴って用いられているものである。また、同じく喧騒の場を表すもので、自然の中に喧騒が響くことを表すものが二例見られる。⑱は琴の音の奇瑞表現、⑲は和歌の例である。(6)

⑱雲のうへよりひゞき、地のしたよりとよみ、風・くもうごきて月・ほしさはぐ。つぶてのやうなるひふり、いかづちなりひらめく。雪ふすまのごとくこりて、ふるすなはちきえぬ。（宇津保物語　吹上　上）

⑲ちひさきかみに
　山とよむをのゝひゝきを尋ぬれはいはひの杖の音にそ有ける（枕草子　しきの御曹司におはしますころ）

喧騒を生じる主体を総称的に示すものとしては、

⑳このひめぎみの御けしきのたゞかはりにかはりゆけば、「（や、こは）いかにするわざぞや」とまどひ給に、ゆゝしうかなし。人〳〵どよみてなきのゝしる程、あさましうゆゝしうかなし。（栄花物語　巻第十六）

㉑いとゞ御しつらひし、御誦経など、そこらの僧のこゑさしあひたるほどに、いみじう、宮はいきだにせさせたまはず、なきやうにておはします。そこらのうちとぬかをつき、をしこりてどよみたるに、みこいか〳〵となきたまふ。（栄花物語　巻第一）

㉒ほのほもえあがりてらうはやけぬ。心たましゐなくてあるかぎりまどふ。うしろのかたなるおほゐどのとおぼしき屋にうつしたてまつりて、かみ下となくたちこみて、いとらうがはしく、なきとよむ聲いかづちにもおとらず。（源氏物語　明石）

⑳「人〳〵」、㉑「そこらのうちと（内外）」、㉒「かみ下となく」の語句が見える。中でも㉒は「おほゐどの（大炊殿）とおぼしき屋」に立ちこみ混雑している様子が描かれ、特に「聲いかづちにもおとらず」と、人々の泣く声の大きさが強

調されている。また、

㉓御いたゞきの御ぐしおろしたてまつり、御いむ事うけさせたてまつり給ふほど、くれまどひたる心ちに、こはいかなることと、あさましうかなしきに、たいらかにせさせ給て、のちの事まだしき程、さばかりひろきもや、みなみのひさし、かうらんの程までたちこみたる僧もぞくも、いまひとよりとよみて、ぬかをつく。（紫式部日記　九月十一日）

㉔あはれゝいのやうにたひらかにおはしまさましかば、こたびはこゝろことにいかにめでたからましといひつゞけて、殿ばら、女房たちなきどよみたる、ことはりにいみじき御事なりかし。（栄花物語　巻第一）

㉓「僧もぞくも」、㉔「殿ばら、女房たち」と、喧騒を起こす人物が具体的に列挙されており、多くの様々な人がその場に居ることが強調される。㉓は先の㉑「をしこりて」、㉒「たちこみて」と同じく、広い産屋から廂、高欄まで人々が押し掛け混雑した中での喧騒である。さらに、「いまひとより」とあることから、「どよむ」は、回数で数えることのできる動作であると考えられ、ここでは祈りの声をあげて額をつく一連の動作をもう一度繰り返すことを表している。さらに、

㉕をのをの身づからの命をばさる物にて、かゝる御身のまたなきれいにしづみ給ぬべきことのいみじうかなしき、心をゝこして、すこし物おぼゆるかぎりは、身にかえてこの御身ひとつをすくいたてまつらむ、ととよみて、もろこゑに佛神を念じたてまつる。（源氏物語　明石）

では、具体的な内容を伴う祈りであること、「もろこゑに」とあることから、複数の人物の声であり、その祈りの声が大きいことが表される。これらを踏まえ、「ゆする」と同様の観点で分類すると［表Ⅲ］のようになる。「ゆする」を分類した［表Ⅱ］と比較すると、一番上の〈社会〉とした欄が空白で、「上下」「内外」などの〈集団〉を表す語句や、「他」に分類した先の用例㉓㉔のように喧騒を生じる複数の具体的な主体が列挙される例が多い。ある一つの場に集まった

［表Ⅲ］平安時代和文の「どよむ」分類

	喧騒の〈場・範囲〉								喧騒の〈主体〉				計
語句例／文献	〈社会〉		〈(建物)の内〉				〈地勢〉			〈人間の集団〉			
	世中	天下	殿	宮	院	家	地下	山	路	上下	内外	人々	他	
宇津保物語														
枕草子														
源氏物語														
紫式部日記														
夜の寝覚														
讃岐典侍日記														
栄花物語			1							1	3	1	1	17(7)
大鏡					2								9	1(0)
計			1		2					1	3	1	10	18(7)
			3(1)				1	1		2			1	1(1)
							1						1	1(1)
								1					1	1(1)
										1			1	3(1)
												1		1(1)
											3			3(1)
										1				1(1)
										1			1	1(1)
													9	9(0)
													1	1(0)
													1	1(1)
													1	1(1)
													1	1(1)
計			3(1)		2(2)					21(9)			26(12)	

人々の起こす喧騒を表すという点では「ゆする」と共通しているが、「どよむ」は先にも述べたように、「ゆする」に比べてより狭い範囲、短い時間の喧騒を表すことが指摘できよう。さらに、祈りや嘆き、泣き声など、大勢が同時に上げる声についての記述を伴うことが多い。これらを考え合わせると、「どよむ」は、喧騒の要素の中でも特に声の大きさに重点をおいた表現であると考えられる。

また、「ゆする」「どよむ」を含む複合動詞を前項後項に分けてまとめると［表Ⅳ］のようになる。複合する動詞は「ゆする」の方が種類が多い。「どよむ」が「なく」や「ののしる」のように、声を出すことを表す動詞とのみ複合して聴覚的な喧騒を表すのに対し、「ゆする」は、「みつ」や「あふ」などと複合し、ある範囲の中に喧騒が充満して一つの大き

［表Ⅳ］「ゆする」「どよむ」を含む複合動詞

ゆする	前項	ひびき(響)―1	め(愛)―1	み(見)―1
	後項	―みつ(満)16	―あふ(合)5	―さわぐ(騒)1	―みる(見)1
どよむ	前項	なき(泣)―3		
	後項	―なく(泣)6	―なきののしる1	―ののしりさわぐ1

な騒ぎを生み出していることを表す。特に「ゆすりみつ」が多く、

㉖おなじさまにて二月もすぎぬ。いふかぎりなくおぼしなげきて、心みに所をかへ給はむとて、二条院にわたしたてまつり給ひつ。院のうちゆすりみちて、思ひなげく人おほかり。冷泉院もきこしめしなげく。（源氏物語　若菜下）

㉗所〳〵の、御とぶらひのつかひなど、たちこみたれど、えきこえつがず、ゆすりみちて、いみじき御心まどひども、いとおそろしきまでみえ給。（源氏物語　葵）

のように、多くの人々が混雑している場全体をとらえ、その中に喧騒が充満している様子を表している。

以上をまとめると次のようになる。平安時代和文において、「ゆする」「どよむ」は共に、大勢の人々が引き起こす喧騒を、その場全体としてとらえて描く語であった。ただし両者の意味用法の差異は、喧騒の要素の中の何に着目するかで異なっている。「ゆする」で表される喧騒は、主に儀式や行事の準備や評判など、大きな出来事によって社会全体に及ぶ広範囲・長期間に渡るものや、建物の内に満ちるものであり、慌ただしい雰囲気としての喧騒である。「ゆする」はそのようないわば抽象的な喧騒を、その場や範囲全体が〈揺レ動ク〉感覚として比喩的に表現したものと考えられる。[7] 耳に聞こえる具体的な音声だけでなく、騒然とした喧騒の雰囲気を表現する「ゆする」は、登場人物個人がひとりで大声で騒ぐような場面が多くはない平安時代和文の内容の特徴を反映しているといえよう。それに対し「どよむ」で表される喧騒は、不安や恐怖、悲しみや祈りの声が響くことであり、限られた場で比較的短時間に起こる喧騒である。このこ

とは、「ゆする」の主体に「社会・建物」が多く、「どよむ」の主体に「人間」が多いということからも裏付けられる。すなわち、慌ただしい動きや雰囲気としての喧騒を比喩的に表現する「ゆする」に対して、「どよむ」は大勢の声が響く様そのものに重点が置かれていると考えられる。(8)

「ゆする」「どよむ」は共に、平安時代和文において、大勢の人々が作り出す喧騒を表す語彙として用いられながら、その意味用法は以上のような点に違いがあり、それぞれに使い分けられていたことが指摘できる。

三　院政鎌倉時代における「ゆする」「どよむ」

次に、両者の関係が時代を経てどう変わったかを考察する。中世王朝物語や女流日記を見ることで平安時代和文からの通時的な流れについて、また説話や軍記物語などのいわゆる和漢混淆文の類で、文体やジャンルによる差異について検討を加える。調査した文献と出現状況とを、私に設定したジャンル毎に示すと［表Ⅴ］のようになる。(9)

平安時代和文での現れ方と比較すると、全体数では、わずかではあるが「どよむ」が「ゆする」よりも多く見え、逆転している。また、ジャンル別に見ると、「ゆする」は中世王朝物語に、「どよむ」はそれ以外の説話や軍記物語などに偏っていることが指摘できよう。これは、平安時代和文において「ゆする」の方が「どよむ」よりも多く用いられていたことと関係があると考えられる。そこでまず、中世王朝物語における用例を検討する。先に述べたように、文章ジャンルを揃えることで、平安時代からの歴史的な変化を考察するためである。

中世王朝物語において、検索し得た「ゆする」は七例、「どよむ」は一例であった。まず「ゆする」を検討する。

①とのゝわか宮の宮ばらにいでき給事、さまで又ためしなきことにもあらぬを、これはなにとかよの中ゆすりてよろこびさはぐを、つたへきくかのかくれがには、御ふみだにたえはてたる日かずつもるも（恋路ゆかしき大将）

②いつき入たてまつるぎしき、おもだゝしげなり。世中にゆすりたる事なれば、公卿、殿上人のこりなく参りあつま

［表V］

	ゆする 単独	ゆする 複合動詞	ゆする 名詞	どよむ 単独	どよむ 複合動詞	どよむ 名詞
松浦宮物語						
岩清水物語	1					
風につれなき物語						
恋路ゆかしき大将	1	2				
あまのかるも	1	1				
小夜衣	1				1	
今昔物語集						
発心集	1	2		3		
宇治拾遺物語		1		3		
十訓抄					3	
古今著聞集	1	1			1	
延慶本平家物語				2		
覚一本平家物語					1	
増鏡		4			4	
方丈記						1
徒然草				9	13	4
計	5	12	17	9	13	4
				26		

中世王朝物語：在明の別れ　松浦宮物語　山路の露　唐物語　あさぢが露　岩清水物語　いはでしのぶ　風につれなき物語　苔の衣　恋路ゆかしき大将　あきぎり　木幡の時雨　あまのかるも　風に紅葉　小夜衣

中世女流日記：うたたね　中務内侍日記　とはずがたり　たまきはる　竹むきが記

説話・法語：三宝絵詞　今昔物語集　三教指帰注　法華百座聞書抄　打聞集　宝物集　閑居友　発心集　宇治拾遺物語　十訓抄　古今著聞集

紀行：海道記　東関紀行

軍記物語：保元物語　平治物語　平家物語（延慶本・覚一本）

歴史物語：今鏡　水鏡　増鏡

随筆：方丈記　徒然草

りて、もてかしづき給ふ御有さまめでたし。（小夜衣）

③八月には、内へ参り給ふべしとて、殿のうちゆすりて、今より御心まうけどもあるをきくにも、さるべき事と思ひまうけたれば、ほんいかなふ心地して、いみじう嬉しく思ひ聞る中に（岩清水物語）

④九月七日夕より、その御けしきときこゆれば、とのゝうちゆすりみちて、うちよりも御つかひひまなし。夜もすがらくるしがりて給て、あけぬ。（あまのかるも）

⑤七月七日、おもふよりもまちこひすぎず、そのみけしきにゆすりみちてなりあひたれば、内よりも御つかひまゐりなどするに（風につれなき物語）

①は若宮の誕生を喜ぶ場面である。平安時代和文での用法と同じく、「よの中」の語句を伴っている。②は儀式の準備で「世中」に喧騒が広がっている様子、③は入内の準備で「殿のうち」が慌ただしい様子を表すものである。複合動詞は、平安時代和文に最も多く見られた「ゆすりみつ」だけが④⑤のように用いられている。

［表Ⅵ］ 中世王朝物語における「ゆする」分類

喧騒の〈場・範囲〉				喧騒の〈主体〉		計
〈社会〉	〈（建物）の内〉			〈人間の集団〉		
世中	国	殿	宮	院	家	上下	内外	人々	他	
2		2							3	7

先に挙げた用例と表の分布、複合動詞が「ゆすりみつ」に限定されていることから、中世王朝物語における「ゆする」は、用いられる場面も用法も、平安時代和文における最も典型的なものに固定化して継承されていると考えられる。

一方「どよむ」は松浦宮物語の一例のみで、次の⑥のように複合動詞として用いられている。

⑥やがて露のきえゆくやうにいふかひなくみえたまへば、御前にさぶらふかぎり、さわぎたちてなきとよむに、御門もきこしめしつけて、いといふかひなくくちをしき事をおぼしなげく（松浦宮物語）

この複合動詞「なきどよむ」は、平安時代和文にも見られたものであった。用例数が少ないため慎重を要するが、「ゆする」「どよむ」ともに、中世王朝物語での意味用法は、平安時代和文での意味用法を受け継いでおり、かつ、典型的であった用法に固定化されていると考えられよう。(10)

次に、中世王朝物語以外の、説話・歴史物語に見られる用例を検討する。得られた十例のうち、⑦から⑩までは『増鏡』に認められたものである。

⑦大方、雲の上けがれぬれば、いかゞにて、中宮の晝の御座へ腰輿よせて、兵衛の陣より出でさせ給ふ。東宮は絲毛の御車にて、又常盤井殿へ渡らせ給。中宮も春日殿へ行啓なる。世の中ゆすりさはぐさま、ことの葉もなし。（増鏡　第十一）

⑧今年も又例ならず悩ませ給へば、めでたき御事の数そはせ給ふべきにこそと、世の中ゆすりさはぐ。(11)御祈りの祭り祓へ、なにくれとおびたゝしく、まだきよりのゝしる。（増鏡　第三）

⑨摂政殿姫君まいり給て、いと花やかにめでたし。この御腹に、建保六年十月十日、一の皇子生まれ給へり。いよ〳〵物あひたる心地して、世の中ゆすりみちたり。（増鏡　第一）

⑩かの那波の又太郎、伯耆の守になりて、それも衛俯の物どもにうちまぜたり。さまかはりて、ゆすりみちたる世の気色、「かくもありけるを、などあさましく嘆かせ奉りけるにか」とめでたきにつけても、なを前の世のみゆかし。（増鏡　第十七）

⑦⑧⑨に「世の中」、⑩に「世の気色」の語句を伴い、広い範囲の喧騒を表し、また⑦⑧「ゆすりさはぐ」⑨⑩「ゆすりみつ」のように複合動詞として現れるように、平安時代和文の用法と類似している。『増鏡』は、『源氏物語』の影響を

強く受けていることが指摘されており、[12] そのことが「ゆする」の用法にも反映していると考えられる。『増鏡』以外の用例は限られている。

⑪従ひ命つきて空しき骸と成りたりとも、今一度その形を見むと歎き悲しむ様、ことわりにも過(スキ)たり。はてには国の中(ウチ)ゆすりみちて、見(ミ)聞く人涙をおとさぬなかりけり。（発心集　巻七　斎所権介成清が子高野に住む事）

⑫備中守政長カ神拝(ハイ)ニ下ケル時、則高・正資・時資ナトイフ時ノ舞ノ上手共ヲ、イサナヒ下リタリケルニ、吉備津宮ノ御前ニテ、則高陵王ヲ舞ケル時ニ、宝殿ユスリヒヽキテオヒタヽシカリケリ。（十訓抄　巻十）

⑬陵王入テ後各舞ケルニ、始ヨリマサリサマニ宝殿ユスリ、[13] イトヽオソロシカリケリ。（十訓抄　巻十）

〈他動詞〉

⑭其ノ時ニ守、音糸高ク成テ居上テ、左右ノ腰ヲユスリ上テ、気色糸悪ク成テ（今昔物語集　巻二十八―三一）

⑮脛ハ針ノ如シテ錫杖ヲ女ノ尻ニ充テ、垂下レハユスリ上テ行クヲ咲ヒ嘲ラヌ人无シ（今昔物語集　巻五―四）

⑪「国の中」は社会的な喧騒、⑫⑬「宝殿」は舞の響きが建物の中に満ちる様であり、ここでも平安時代和文での意味用法と類似している。先の『増鏡』の例と同じく、固定化された用法と見ることができよう。また今昔物語集の⑭⑮「ユスリアグ」は、〈揺り動カス〉ことを表す他動詞として用いられている。この二例を除き、平安時代和文での分類に従って分けると［表Ⅶ］のようになる。

表の中で「川」に分類した一例は、今昔物語集の和歌の例である。[14]「ゆする」は主に喧騒の場・範囲を表す語句を伴う用法に偏り、平安時代和文・中世王朝物語での様相と似た傾向を見せる。

次に「どよむ」を検討する。「どよむ」は、説話・軍記物語・歴史物語・随筆[15]に現れ、「ゆする」より広いジャンルにわたって見られる。

⑯庭火を十まはりばかり走りまはりたるに、上より下ざまにいたるまで、大かたどよみたりける。（宇治拾遺物語　部従

［表Ⅶ］所謂和漢混淆文における「ゆする」分類

喧騒の〈場・範囲〉				喧騒の〈主体〉				計
〈社会〉	〈（建物）の内〉		〈地勢〉	〈人間の集団〉				
世中	国	殿	宮	院	家	川	上下	内外	人々	他	
4	1	2				1					8

家綱行綱互某事　巻五ノ五）

⑰かくのごとく言ひはてて、「冠もて來」というてなん、とりてさし入ける。其時に、どよみて笑ひのゝしることかぎりなし。（宇治拾遺物語　元輔落馬事　巻一三ノ二）

⑱ある時ひるねしたりける夢に、俄にこの家の内に上下の人どよみて泣きあひけるを、いかなる事やらんとあやしければ、立出て見れば（宇治拾遺物語　大安寺別当女嫁する男夢見る事　巻九ノ七）

⑲「御産平安、皇子御誕生候ぞ」と、たからかに申されければ、法皇を始めまいらせて、関白殿以下の大臣、公卿殿上人、をのをのの助修、数輩の御験者、陰陽頭、典薬頭、すべて堂上堂下一同にあ（ッ）と悦びあへる声、門外までどよみてしばしはしづまりやらざりけり。（覚一本平家物語　巻三）

⑳「……いま一たび、御声なりとも聞かせさせ給て、いづ方へも御供に率ておはしましてよ」と、声も惜しまず泣き入給へるさま、いとあはれ也。すべて、宮の内とよみ悲しむさま、いはん方なし。（増鏡　巻十四）

『宇治拾遺物語』の⑯については、同文的内容の『十訓抄』の当該箇所に「大方主上ヲ始メマイラセテワラハセ給コト限ナシ（巻第七―一七）」とあり、見物の大勢の人々が大声で笑う様子が伺える。[16] また、⑰「どよみて笑ひのゝしる」、⑱「どよみて泣きあひける」と、副詞的に用いられて、泣いたり笑ったりする声の大きさを表す例や、⑲「悦びあへる声」、

⑳「声も惜しまず」と、その「声」に着目した聴覚的な喧騒を表す例が見える。この他、人間以外を主語として、暴れる馬、吹きすさぶ辻風、押し寄せる洪水など、大きな音声を伴う、動物や自然の動きを表すものとして次のような例がある。

○馬共ハドヨミニドヨマサレテ走リ騒ゲバ、括カニ取テ轡ヲ□ル者モ无シ。（今昔物語集　巻二五―五）

○かかる程に、雨（沃）こぼす如くふりて、おびたたしかりける夜中ばかり、俄に（雷）の如く、よにおそろしく（鳴）りどよむ声あり。（発心集　武州入間河洪水の事）

これらのことを表にまとめると［表Ⅷ］のようになる。先の［表Ⅶ］と比較すると、両者の差異は平安時代和文の場合よりも大きくなっている。「どよむ」は、喧騒の主体である人間の集団を表す語句を伴う例に偏って多く見え、喧騒を場や範囲でとらえるのではなく、笑い、泣き、声を出している人々に注目していると考えられる。

［表Ⅷ］所謂和漢混淆文における「どよむ」分類

喧騒の〈場・範囲〉			喧騒の〈主体〉									計
〈社会〉	〈(建物)の内〉		〈人間の集団〉						〈人間以外〉			
世中	国	殿	宮	院	家	上下	内外	一同	大方	人々	他	馬	辻風	洪水	
		2				1	1	2	2	1	11	2	2	1	25

また、複合動詞は、「ゆする」は結びつく語が少なくなり、ほとんどが平安時代和文に多く見られた「ゆすりみつ」に限られているのに対し、「どよむ」は平安時代和文には見られなかった「なりどよむ」「わらひどよむ」「どよみあかす」が見られるようになる。

以上のことを考え合わせ、院政鎌倉時代における「ゆする」「どよむ」の意味用法を、平安時代和文との比較を通して

［表Ⅸ］「ゆする」「どよむ」を含む複合動詞

ゆする	前項	
	後項	―みつ(満)7　―さわぐ(騒)2　―ひびく(響)1
どよむ	前項	なり(鳴)―3　わらひ(咲)―1
	後項	―あふ(合)3　―わらふ(咲)2　―かなしむ(悲)1　―あかす(明)1

まとめると次のようになろう。「ゆする」は、王朝物語のように平安時代和文の影響を受けた文体を持つジャンルに偏り、出現頻度も低く、意味用法は固定化する。多くが複合動詞「ゆすりみつ」の形で現れ、単独で用いられる例が少なくなっていることや、〈揺り動カス〉という意味の他動詞で現れることからも、平安時代和文には多く見られた喧騒を表す意味用法としては、その流れを汲む中世和文以外では次第に用いられなくなっていく様子が見える。一方「どよむ」は、音声の大きさに重点が置かれた聴覚的表現としての性質を強め、[17] 王朝物語では使用が避けられる一方で、大勢の人々が同時に大声を出す様子を表す語として、特に説話や軍記物語の様々な場面の中で用いられるようになった。

平安時代和文との比較を通して「ゆする」が固定化し減少すること、「どよむ」が多様化し拡大することの背景については、次のように考えている。平安時代和文において、喧騒が描かれるのは、人の死、誕生、儀式などの特別な場面に限られていた。「ゆする」「どよむ」は、そのような場面の喧騒を、登場人物一人一人ではなく、騒ぎの満ちる場全体としてとらえ表現する語彙として用いられていた。特に「ゆする」は、〈揺レ動ク〉ことから喧騒を表す意味用法へと比喩的に派生し、大きな出来事による混乱した状態の喧騒を表す語として使用されていた。院政鎌倉時代以降の説話では、人の死など非日常の特別な場面に限らず、人々が大声で笑い、泣き、叫ぶ、日常的に起こりうる出来事での喧騒が描かれることも多い。描かれる場面が日常的になることに加え、喧騒の描き方も、平安時代和文に多く見られた、社会や建物のように喧騒の生じる場や範囲ではなく、騒いでいる登場人物の行為としてとらえ、表現するようになった。平安時

代和文では比較的近い関係にあった両者の差異が拡がった背景には、話の内容や文体の違いが存在すると考えられる。

四　中世以降における「ゆする」「どよむ」

三で考察した「ゆする」「どよむ」の意味関係の変化は、中世以降の文献でも確認できる。登場人物の声が大きく響く、より聴覚的な喧騒を表していた「どよむ」は、『日葡辞書』に項目が挙がっており、

Doyomi, u, ôda.　ドヨミ，ム，ウダ（どよみ，む，うだ）

遠方から大声でわめく．¶また，大砲などが轟音をたてて鳴りひびく．（邦訳日葡辞書　190l）

と、大きな音や声が響く喧騒を表す意味が記載され、その聴覚的な面が強調されている。また、複合動詞としても、

Naqidoyomi, mu, ôda.　ナキドヨミ，ム，ウダ（泣きどよみ，む，うだ）

大勢の者が，一緒に高い声を入りまじらせて泣く．（450 r）

Naridoyomi, mu, ôda.　ナリドヨミ，ム，ウダ（鳴りどよみ，む，うだ）

何か大音響がきこえる，または，騒音が聞こえる．（452 r）

の二例が掲載されている。「泣きどよむ」「鳴りどよむ」ともに、音や声が大きく響く喧騒を表す、聴覚的な複合動詞であるといえよう。それに対し、平安時代和文から次第に用法が固定化し、縮小してきた「ゆする」は、『日葡辞書』には喧騒を表す意味が記述されず、〈揺リ動カス〉という他動詞の用法だけが見える。

Yusuri, ru, utta.　ユスリ，ル，ッタ（揺すり，る，った）

ふるえる人などのように，身体をゆり動かす，振動させる．（邦訳日葡辞書　838l）

また、その他の文献でも、「ゆする」は〈揺リ動カス〉を意味する他動詞として用いられている。(18)

①木にあがりて、かきを取てくふまねをする、木は大臣柱なり、あがるとそのまゝ　丶木を見付つぶて打、ゆすりな

どしてあがる（虎明本狂言集　柿山伏）

②わき上面のかたへかほをなしてねる、あどいねなをるやうにして、手を打かけ、ゆすりてみて、そつとぬけて、してばしらのところにて（虎明本狂言集　じしやく）

③「汝舌をさし出せ」とのたまへば、なのめならず喜びて、鎖をゆすり舌を出したるを御覧ずれば、長さ一尺ばかり也。（御伽草子　梵天國）

このように、「ゆする」は次第に、平安時代和文には多く見られた喧騒の状態を表す語としては用いられなくなり、本来の〈揺レ動ク・揺リ動カス〉という意味を表す語として用いられるようになったと考えられる。先にも述べたように、音声の大きさだけでなく、慌ただしい動きを含めた喧騒の雰囲気を表現する語として用いられていた「ゆする」は、平安時代和文に特徴的なものであったといえよう。

五　むすび

本稿では、平安時代和文において喧騒を表す語彙として類義関係にあると考えられる「ゆする」「どよむ」の意味用法を考察してきた。平安時代和文において、「ゆする」は、広範囲・長期間にわたる喧騒を表し、動きや雰囲気の慌ただしさが意味の中心であった。「どよむ」は、限られた範囲・短時間の喧騒であり、多数の人々の声が響く様を表すことが意味の中心であった。また、その意味関係を、院政鎌倉時代文献との比較を通して通時的に見ると、「ゆする」の喧騒を表す用法は、和文の中でも中世王朝物語に限定され、用法も縮小、固定化していった。逆に「どよむ」は中世王朝物語では用例数が少なくなる一方で、人々が同時に大声を上げる様子を表す語として、平安時代和文には見られなかった複合動詞が生まれるなど、特に説話や軍記物語のジャンルにおいて拡大し、両者の差異は拡がっていったと考えられる。(19)

喧騒とは、音声が大きく響く状態と、音声だけでなく動きが不規則無秩序で、慌ただしく混乱している状態とを含む

ものと考える。その喧騒の描き方は、時代、ジャンル、個々の文献によって様々である。本稿で取り上げた「ゆする」は、〈揺レ動ク〉ことが意味の中心であり、喧騒を場や範囲全体として感覚的にとらえた表現であった。それは、他の時代やジャンルには少ない、平安時代和文に特徴的な表現の仕方であったことを指摘した。和歌に用いられた両語の意味用法や、語源に関わる問題、上代や中世以降の様相など、検討すべき課題は多く残っている。それらを踏まえながら、「ゆする」「どよむ」だけでなく、喧騒を表す語彙の様々な様相を明らかにしていく一階梯としたいと考えている。

注

(1) 「どよむ」の清濁については、『万葉集』「保登等藝須奈伎之等与米婆」(3993)などから、上代においては清音であったこと、前田本『色葉字類抄』(注(2))により、後に濁音に変化したことが推測されるが、その変化の時期、特に平安時代和文や和歌における清濁については、現段階では確かなことは述べ得ない。また、秋永一枝『古今和歌集声点本の研究』(校倉書房、昭和五十五年)によれば、「秋なれば山とよむまでなく鹿に」(古今集恋二582)の「とよむ」に濁点を付す古注の中には、「此声トヨムナレトモ無骨ナルニ依テスミテヨメリ」(『堯恵本古今集聞書一名延五記』延徳四年)のような記述もあり、この清濁に関しては、語義や語感、語源意識の問題が含まれているように思われる。本稿では「どよむ」に統一し、用例は用いたテキストの表記に従うこととする。

(2) 前田本『色葉字類抄』には、「ゆする」「どよむ」それぞれに「動」字が掲載される。

浮(ユスル)—兒也　動(同)—地來也　(下六八ウ三　由部　辞字)

動(トヨム)…　(上六〇オ六　度部　辞字)

また、「—地來也」は『白氏文集』の詩句であるが、金沢文庫本『白氏文集』巻十二(川瀬一馬監修『金澤文庫本白氏文集』勉誠社、昭和五十八年十月)に

漁—陽の鞞(フツツミ)—鼓(都迷反)・地(返)を動來(ユステ)ル(トヨム)

とあり、「動」字に「ゆする」「どよむ」の訓が見える。これらのことから、両語は類義関係にあると考える。

（3）調査した文献と使用したテキストは以下の通りである。

伊勢物語・大和物語・落窪物語・堤中納言物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・篁物語：岩波日本古典文学大系　土左日記・紫式部日記：岩波新日本古典文学大系（本稿で用例を掲げる際、底本の文字遣いをルビ等で残している場合はそれに従った）　讃岐典侍日記：小学館日本古典文学全集　竹取物語（上坂信男『九本対照竹取翁物語語彙索引』笠間書院・昭五十五）　平中物語（曽田文雄『「平中物語」研究と索引』渓水社・昭六十）　多武峯少将物語（小久保崇明『多武峯少将物語本文及び総索引』笠間書院・昭四十七）　蜻蛉日記（佐伯梅友・伊牟田経久『改訂新版かげろふ日記総索引』風間書房・昭五十六）　宇津保物語（宇津保物語研究会『宇津保物語本文と索引本文編』笠間書院・昭和四十八年）　枕草子（田中重太郎『校本枕草子』古典文庫・昭二十八～四十九、本稿で掲げた用例は能因本）　源氏物語（池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論社・昭和二十八年～昭和三十一年、本稿で用例を掲げる際には、岩波新古典文学大系の表記に従い句読点・濁点を付した）　和泉式部日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欽吾『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭三十四）　更級日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引』武蔵野書院・昭三十一）　栄花物語（高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』武蔵野書院・昭六十一、本稿で用例を掲げる際には、岩波古典文学大系の表記に従い句読点・濁点を付した）　大鏡（根本敬三『対校大鏡』笠間書院・昭五十九）とりかへばや物語（鈴木弘道『校注とりかへばや物語』笠間書院・昭五十一）

（4）本文は『源氏物語古注釈大成』第六巻（日本図書、昭和五十三年十月）による。『花鳥余情』の引用する『源氏物語』の当該箇所は、河内本を始め諸本に異動があり、大島本を底本とする本稿での用例③とは異なる。

（5）自然の地勢を表す語句を伴う例のうち『狭衣物語』の例

・内にも、大殿、ついで作りて、そうし給ければ、「人の物言ひは眞なりけり」と思し召して、「猪名山ゆすり」にては取所なきを「げに、さもなどかは」と思し召すを（狭衣物語　巻三）

は、諸本に異同が多いが、『万葉集』巻十の「四長鳥　居名山響尓　行水乃　名耳所縁之　内妻波母《一云、名耳所縁而戀管哉將在》」（2708）を踏まえているとされる（岩波古典文学大系補注四九八頁）。また、その他書所伝については、『猿丸集』「しながとりゐな山ゆすりゆくみづの」（6）、『古今和歌六帖』「しながどりゐな山ひゞき行く水の」（3107　かくれづま）、『夫木和歌

抄』「しながどりゐな山とよみゆく水の」(8520)となっている。地勢に音が響く様を表す「ゆする」「どよむ」が、和歌にも用いられること、また、『万葉集』の「響」字を介して、「ひびく」「ゆする」「どよむ」が類義関係にあることが指摘できる。

(6) 『宇津保物語』で琴の音の奇瑞に用いられること、和歌の例で多く自然の地勢を表す語句を伴うという点は、「ゆする」とも共通している(注(5))。特に和歌における「ゆする」「どよむ」の意味用法は、散文である平安時代和文での意味用法と異なる様相を見せるが、詳細は後の考察に俟ちたい。

(7) 「ゆする」は、『源氏物語』古注にも「動」字で注されることが多い。例えば本稿の用例①⑭㉗についての注を掲げるとそれぞれ次のようになる。「動」字が用いられることには、①にも引かれた『白氏文集』の影響もあると考えられる。

①ゆすりみちて　動ユスル　漁陽鞞鼓動地來文集　(紫明抄　山本利達・石田穣二校訂『紫明抄・河海抄』角川書店)

⑭ゆすりみちて　動　(河海抄　山本利達・石田穣二校訂『紫明抄・河海抄』角川書店)

㉗えきこえつがず　え申次さる也　ゆするは動響さま也　(岷河入楚　『源氏物語古注集成』)

(8) 音声の大きさそのものを表す「どよむ」に対し、「ゆする」は

・たまはりてなに心なくかきならすに、天地ゆすりてひゞく。(宇津保物語　吹上　上)

・ひたひははげいりて、つや〳〵とみゆれば、物見る人にゆすりてわらはる。(落窪物語　巻之二)

のように、「ゆすりて〜」の形で後に続く動詞を副詞的に修飾し、その喧騒の状態が広い範囲にわたって〈揺レ動ク〉感覚を覚えるほどであることを表す例が多く(単独動詞二十三例中十九例)、この構文上の特徴も両者の意味用法の違いを反映していると考えられる。

(9) 本文は以下のものを用いた。

『鎌倉時代物語集成』第一巻〜第三巻(在明の別れ・唐物語・あさぢが露・岩清水物語・いはでしのぶ・風につれなき物語・苔の衣・恋路ゆかしき大将・あきぎり・木幡の時雨・あまのかるも・風に紅葉・小夜衣)　角川文庫(松浦宮物語)　山内洋一郎『源氏物語外篇山路の露本文と総索引』(笠間書院・平八)　次田香澄・酒井憲二『うたゝね本文及び総索引』(笠間書院・昭五十一)　鈴木一彦・鈴木雅子『たまきはる(健御前の記)総索引』(明治書院・昭五十四)　馬淵和夫監修・中央大学国語研究会編『三宝絵詞自立語索引』(笠間書院・昭六十)　岩波古典文学大系(今昔物語集・宇治拾遺物語・古今著聞集・増

鏡・保元物語・平治物語・覚一本平家物語）　岩波新古典文学大系（中務内侍日記・とはずがたり・竹むきが記・海道記・東関紀行）　山内洋一郎『古本説話集総索引』（風間書院・昭四十四）　築島裕・小林芳規『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』（武蔵野書院・昭五十五）　小林芳規『法華百座聞書抄総索引』（武蔵野書院・昭五十）　東辻保和『打聞集の研究と総索引』（清文堂出版・昭五十六）　月本直子・月本雅幸『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』（古典籍索引叢書6・汲古書院・平五）　峰岸明・王朝文学研究会『閑居友本文及び総索引』（笠間書院・昭四十九）　高尾稔・長嶋正人『発心本文・自立語索引集』（清文堂・昭六十）　泉基博『十訓抄本文と索引』（笠間書院・昭五十七）　榊原邦彦・藤掛和美・塚原清『今鏡本文及び総索引』（笠間書院・昭五十九）　榊原邦彦『水鏡本文及び総索引』（笠間書院・平二）　北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語本文篇』（勉誠社・平二）　青木怜子『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院・昭四十）　時枝誠記『改訂版徒然草総索引』（至文堂・昭四十二）

(10)「和文」でありながら、中世女流日記に「ゆする」「どよむ」ともに用例が見られないことについては、なお調査文献を増やし、慎重に考えたい。今は、「ゆする」が縮小・固定化したことと、「どよむ」が説話等の和漢混淆文において用法を拡大し、和文的な語としては用いられなくなったこととが反映していると考えている。

(11)　当該箇所、蓬左文庫蔵尾張徳川家本その他諸本「めてたくきこゆ」

(12)　佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院、昭和五十二年十月）などによる。

(13)　当該箇所、テキストの底本（宮内庁書陵部本）では「ヱスリ」とあるが、用例⑫と近い部分であること、「ヱスリ」では意味が通らないことから、吉田幸一博士蔵本（旧大島本）に従い「ユスル」として扱った。

(14)　アサモヨヒキノカハユスリユクミヅノイヅサヤムサヤイルサヤムサヤ（巻三十　人妻化成弓後成鳥飛失語第十四）

(15)　『徒然草』には二例の「どよむ」がみえる。文体としては和文であるとされるが、「どよむ」が現れるのは説話的な章段であることを踏まえ、説話・軍記物語と同じグループに含めて論を進めた。なお検討を要すると考えている。

(16)　用例⑰⑱の、同文的説話の当該部分は次の通りである。「喧ル」で表され、声の大きいことを示す例が見える。

⑰此ヲ見ル人諸心ニ咲ヒ喧ケリ」（今昔物語集　二八―六）

⑱俄ニ此ノ家ノ内ノ上中下ノ人喧テ泣キ合タリ」（今昔物語集　一九―二〇）

(17) 『平家物語』から見え始め、大声で騒ぐことを表す「どよめく」は、「どよむ」の「どよ」の部分がオノマトペとして意識されることによって生じたものと考えられる。

・奥には平家ふなばたをたゝいて感じたり、陸には源氏ゑびらをたゝいてどよめきけり。（覚一本平家物語　那須与一）

(18) 本文は、池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇』（表現社・昭四十七～昭五十八）及び岩波日本古典文学大系（御伽草子）による。

(19) 「ゆする」「どよむ」ともに中世以降の実態については、なお多くの調査・論証が必要である。

［付記］本稿は国語学会中国四国支部大会（平成九年十一月十五日於愛媛大学）における口頭発表をもとにまとめたものである。発表の席上、小林芳規先生、室山敏昭先生、関一雄先生、小山敦子先生より、また三宅清先生をはじめ多くの方々より貴重な御教示を賜った。心より御礼を申し上げたい。